

歌集

別離

若山牧水著



離 別

水 牧 山 若

版 藏 堂 雲 東

明治四十三年四月五日印刷
明治四十三年四月十日發行

正價金七拾五錢

著作者 若 山 繁

京橋區南傳馬町三丁目十番地

發行者 西村 寅次郎

神田區松下町七、八番地

印刷者 横田 五十吉

不許
複製

發行所

東京市京橋區南傳
馬町三丁目十番地

東雲堂書店

電話本局一六三九、振替東京五六一四

（別離集附）

刷印所版活田横

名著複刻全集 近代文学館 昭和43年9月1日・日本近代文学館

自序

廿歳頃より詠んだ歌の中から一千首を抜き、一卷に輯めて『別離』と名づけ、今度出版することにした。昨日までの自己に潔く別れ去らうとするところに外ならぬ。

先に著した『獨り歌へる』の序文に私は、私の歌の一首一首は私の命のあゆみの一步一步であると書いておいた。また、一步あゆんで、小さな墓を一つ築いて來てゐる様なものであるとも書いておいた。それらの歌が背後につづいて居ることは現在の私にとつて、可憐しくもまた少なからぬ苦痛

であり負債である、如何かしてそれらと絶縁したいといふ念願からそれを一まとめにして留めておかうとするのである。然うして全然過去から脱却して、自由な、解放せられた身になつて、今まで知らなかつた新たな自己に親しんで行き度いとおもふ。

また、昨年あたりで私の或る一期の生活は殆ど名残なく終りを告げて居る。そして丁度昨年は人生の半ばといふ廿五歳であつた。それやこれや、この春この『別離』を出版しておくのは甚だ適當なことであると私は歎んで居る。

本書の装幀一切は石井柏亭氏を頼はした。寫眞は一昨年の初夏に撮つたものである、この一卷に收められた歌の時期の中間に位するものなので挿入しておいた。

歌の掲載の順序は歌の出来た時の順序に従うた。

左様なら、過ぎ行くものよ、これを期として我等はもう永久に逢ふまい。

明治四十三年四月六日

著者

別

離

上

卷

自明治三十七年四月
至同四十一年三月

水の音に似て啼く鳥よ山ざくら松にまぢれ
る深山の晝を

なにとなささびしさ覺^{おほ}え山ざくら花ちるか
げに日を仰^{あふ}ぎ見る

山越えて空わたりゆく遠^{とほ}鳴^{なり}の風ある日なり
やまざくら花

朝地震^{なみ}す空はかすかに嵐して一山^{いもざん}白きやま
ざくらばな

行きつくせば浪青やかにうねりぬ山ざく
らなど咲きそめし町

朝の室^{むろ}夢のちぎれの落ち散れるさまにちり
入る山ざくらかな

阿蘇の街道^{みち}大津の宿^{しゆく}に別れつる役者^{やくしゃ}の髪^{かみ}の
山ざくら花

母戀しかかるゆふべのふるさとの櫻咲くら
む山の姿よ

父母よ神にも似たるこしかたに思ひ出あり
や山ざくら花

春は來ぬ老いにし父の御ひとみに白ううつ
らむ山ざくら花

怨みあまり切らむと云ひしくろ髪に白躑躅
さすゆく春のひと

忍草雨しづかなりかかる夜はつれなき人を
よく泣かせつる

山脈や水あさぎなるあけぼのの空をながる
る木の香かな

日向ひらがの國くにむら立つ山のひと山に住む母戀し
秋晴あきはれの日や

君が背戸せどや暗やみよりいでてほの白しろみ月のなか
なる花月はなつき見草みぐさ

蟬こほろぎや寢ものがたりの折り折りに涙もまぢる
ふるさとの家

秋あさし海ゆく雲の夕^{ゆふ}照^てりに背戸の竹の葉
うす明^{あか}りする

朝^{あさ}寒^{さむ}や萩に照る日をなつかしみ照らされに
出^でし黒かみのひと

別れ來て船にのぼれば旅^{ちよ}人^{びと}のひとりとなり
ぬはつ秋の海

秋風は木の間に流る一しきり桔梗色してや
がて暮るる雲

白桔梗君とあゆみし初秋の林の雲の静けさ
に似て

思ひ出れば秋咲く木木の花に似てこころ香
りぬ別れ來し日や

秋立ちぬわれを泣かせて泣き死なす石とつ
れなき人戀しけれ

この家は男ばかりの添寝そひねぞとさやさや風の
樹に鳴る夜なり

木の蔭や悲しさに吹く笛ふえの音ねはさやるもの
なし野にそらに行く